死産した革命「ドイツの十月」*

勝　部　　元

第一章　「反ファッショ・デー」をめぐる情勢

1923年7月にはいるとＫＰＤ（ドイツ共産党）の「シュラーゲター路線」の決定的失敗は明らかとなった。ルール占領に関連して，右翼ファシスト傘下の小ブル大衆をかちとろうというこの路線は，まったく成果をあげることができなかった。それでもなおこの民族ボリシェヴィズム路線は9月まで続いた。

当時，革命的危機の間近いことは認識されていたが，権力掌握の問題はまだ当面のこととはされていなかった。

＊この論文は「ドイツ革命と民族ボリシェヴィズム」(1)（社会学論集19巻1号），同(2)（社会学論集20巻1号），同(3)（社会学論集21巻2号），『現代世界の政治状況』勁草書房所収の続編である。

コミンテルンからＫＰＤへ派遣されていたラーデク（Karl Radek）は「ローテ・ファーネ」5月18日第111号でつぎのように確言している。

「今日われわれは，プロレタリア独裁を樹立する立場にはない。何故ならプロレタリアートの大多数の中に，革命的意志は存在していないから。」

またコミンテルン議長ジノーヴィエフ（Grigorij Zinoviev）も，23年6月の拡大執行委員会の報告の中でこういっている。

「そうだ，同志諸君，ドイツは革命の前夜にある。しかしこのことは革命がおこるまで1カ月か1カ年まてばよいということを意味しない。たぶんもっと多くの時が必要であろう。だが歴史的な意味でドイツはプロレタリア的

変革の前夜にある。」(1923－6，拡大ＥＫＫＩ，Wortlaut der Rede und des Schlusswortes des Genossen Sinowjew Zum Tätigkeitsbericht der Exekutive der KI. Inprekorr 111. 1923. 17－3)

だがドイツの経済的・政治的危機は急激に深刻化しつつあった。先ず何よりも奔馬のように暴走するインフレーションがあった。第1表をみられよ。

第1表　米1ドルにたいするマルク

1923年1月	17,972.00マルク
7月	353,412.00マルク
8月	462,045.50マルク
9月	98,860,000.00マルク
10月	25,260,208,000.00マルク
11月	4,200,000,000,000.00マルク

このような破局的インフレ，マルクの減価は，国民の生活を直撃し，労働者の実質賃金をたえず引き下げる結果をもたらした。また失業者の増大の問題もあった。300万といわれる失業者が街にあふれていた。食料事情も深刻化し，国民は飢餓の問題に直面していた。こうした事情は国内の階級対立を激化させ，労働者のストライキの大波がドイツ全土をおおった。

ルールのフランス軍占領地域でおこった鉱夫の大ストライキは，5月29日に中止を余儀なくされたのだが，今度は占領地外の地域で大ストが続々とおこった。6月上旬，オーバーシュレージェンの鉱・工業労働者数千人が立ち上り大ストをはじめた。ハンブルク，ブレーメン，エムデンで船員のストが続いた。6月にはザクセン，ブランデンブルクのプロイセン地区，メクレンブルクの金属労働者のストがおこり，7月にはベルリンに飛び火した。これらのストは必ずしもＫＰＤの指導下にはなかった。とはいえ中央スト指導部の43名中10名は共産党員であった。就業人口中25%をしめる農民中富農や中農は依然保守的であったが，貧農層がＫＰＤの傘下に集まってきた。(ＯＫフレヒトハイム，高田爾郎訳「ワイマール共和国期のドイツ共産党」ペリカン社　166～167ページ　Osip K. Flechtheim ; Die KPD in der Weimar

Repablik JUNIUS 1886 S. 137)また同時にＫＰＤへの支持も広まっていった。Ｏ・Ｋ・フレヒトハイムはつぎのようにのべている。

「１月末，ライプツイヒにおいて，ルール危機の間の政策を確定すべくＫＰＤ第８回大会が開かれた。党は，大会で，党員22万5,000人，国会議員13人，州議会議員97人と報告した。党は，6,000人以上の市町村代表を擁し，80の市町村において過半数を制し，170のそれにおいては最強の政党であった。また党は，ＡＤＧＢ（Allgemeine Deutscher Gewerkschaftsbund. ドイツ労働総同盟）の60の地方組合で多数派であり，少なくとも400人の労働組合専従者が党員であった。[1]」

「ＳＰＤ（ドイツ社会民主党）は当時急速に衰退しつつあったとはいえ，なおかなりの労働者層による支持をうけていた。他方ローゼンベルクが考えていたように，[2]ＫＰＤも事実，1923年夏にはドイツのプロレタリアートの多数の支持をうけていたことは，立証はできないにしても，つぎの数字によって判断することは十分できる。当時，たいていの選挙は一時停止されていたため，23年前後に行われた選挙に基づかなければならず，またその場合，ＫＰＤの強さは23年中はもっと大きかったことをも考慮に入ておかねばならない。

まず得票数についていえば，ＫＰＤは，1923年７月のメクレンブルク＝シュトレーリッツの州議会選挙で，ＳＰＤの１万2,000票に対して１万1,000票を獲得した。（1920年には，ＵＳＰＤ（独立社会民主党）2,000，ＳＰＤ２万5,000，[3]ＫＰＤゼロ）1922年11月のザクセン州議会選挙では，ＫＰＤは26万7,000票，1924年１月11日の同州市町村選挙では37万8,000票（総得票数の16.5％）を獲得した。1924年２月10日のチューリンゲン州議会選挙では，８万7,000票ふやして16万票となった。[4]他方，1923年６月10日のオルデンブルク州議会選挙では，ＫＤＰはその得票数を４倍にしたものの，その実数では僅か１万1,000票と２議席（総議席数46のうち）を得たにとどまった。またブレーメンとダンツィヒにおける1923年11月18日の選挙でのＫＰＤの各得票は，ＳＰＤの４万5,000と３万9,000とに対して，それぞれ２万7,000，

1万5,000であった。また1924年2月10日のリューベックにおける市会議員選挙で，ＫＰＤの得票は4,330から8,896に増加したが，それに対してＳＰＤの得票は2万5,321であった。[5] さらに，革命的な波がとっくに引いてしまった1924年5月の国会議員選では，ＫＰＤの得票のＳＰＤのそれに対する割合は4対6であった。[6]

また労働組合に対するＫＰＤの影響力については，ＵＳＰＤの分裂後，組合内反対派はＫＰＤの指導下に，政治的にも数的にも強力な勢力に発展し，『1923年まではＡＤＧＢの中で多数を占める道にまっしぐらにすすんでいた。』[7] といえる。もっともそれから後になると，もはやそれほど楽観的ではなくなった。たとえばヘッケルトは，1927年の第11回党大会において，ＫＰＤは1923年にはおそらく労働組合に組織された労働者の30%から35%に影響力を持っていたであろう，と述べていた。[8] 1923年7月23日に行われた金属労働組合大会への代議員選挙において，反対派（ＫＰＤとＵＳＰＤ）は，過半数の票と代議員の3分の2を獲得した。[9] 同じく7月のベルリン金属労働組合の組合員の中での票決では，ＫＰＤは5万4,000票を得たのに対して，ＳＰＤの得た票は僅か2万2,000票に過ぎなかった。[10] また繊維労働者の組合大会の選挙においても，反対派は代議員の3分の1を獲得した。ＫＰＤの労働組合フラクションの数は，1923年7月と同年10月末との間に，4,000から6,000へ，党の代表者，組合専従者および企業の職員の中の党員数は，286人から342人へ増加し，[11] 赤色組合連合の数はほとんど倍増した。（1,100から2,100へ）[12] さらに反対派を支持する労働者数は1923年7月で250万人と推定された。[13]

ＫＰＤの影響力がさらに強かったのは，労働組合においてよりも経営レーテにおいてであった。1922年11月のベルリンにおける全国レーテ大会には，全部で802の経営レーテが参加した。しかし，この場合当然，考慮に入れておかなければならぬことは，問題はＫＰＤによって支配された，いわゆる統一戦線のキャンペーンにあった，ということである。1924年2月と3月との経営レーテ選挙はＫＰＤに大きな成功をもたらした，といわれた。[14] それよ

りさきの1923年９月９日のベルリン＝ブランデンブルクの経営レーテ大会には，開催が禁止されていたにも拘らず，450人の代議員が参加した。また11月25日のいわゆる「ワイマル協議会（Konferenz）」には，1,800の地方委員会と地方連盟から273人の代議員が参加したが，そのうち175人はＫＰＤ，63人は統一社会民主党（ＶＳＰＤ），５人はＵＳＰＤ，18人は無党派であった。[15] したがって1923年には，ＫＰＤは，少なくとも労働組合に組織された少数の強力な労働者とおそらくは多数の未組織の労働者の支持をもうけていた，と最終的には結論することができる。」（前掲フレヒトハイム171〜172ページ，原書Ｓ142〜143）

そういう情況の中で，突如としたハプニングがおこった。７月12日号の「ローテ・フアーネ」に，慎重派で右派のブランドラー執筆のラディカルなアッピール「党へ告ぐ」（An die Partei）が掲載されたことである。これは前日の中央部（Zentrale）の結論にもとづいてファシストの蜂起の危険を告げ，「われわれは決定的闘争に近づきつつある」と警告している。その要旨はつぎのとおりである。

クーノ政府は破産した。『国内・外』の危機は熟した。フランス占領下の地域，つまりライン・ウェストファレン地方で，フランスは分離主義運動を支持している。分離主義運動は夏のおわりまでにフランスとドイツの間に独立の緩衝国をつくることを期待している。南のドイツのファシストが秋の収穫の期間の終らぬうちに内乱を始めようとしている。バイエルンでもまた北部ドイツでも，ファシスト組織は熱狂的に，主としてプロレタリアートにむけられた大規模な暴動の準備をしている。ファシストは高い地位の国防軍将校とブルジョア政党によって積極的に支持されている。この計画は政府の役人と社民党員をふくめ国会議員および地方議員によって積極的に支持されている。しかしまた社民党員はおずおずと労働者に来るべき危機について報告している。――そしてわれわれは来るべき闘争にそなえねばならないと強調する。「行動の全面的な準備をせねばならない」如何にしてファシストの攻撃がおこるか，だれにもわからない。社民にせよ労組にせよ信頼はおけない。

反対に「もしわれわれが社民と無党派労働者大衆をわれわれとともに闘争に導くことに成功する場合にのみ裏切りものの社民の指導者と労組貴族ぬきに，またはかれらに反して革命闘争に勝利を得ることができるだろう。」ついでアピールには「公然たる国内戦」における行動を如何に準備するかについて細部にわたる指針が述べられている。情勢の緊急性を強調してアピールは，ファシストは武装抵抗をして労働者が捕えられた場合，かれらすべてを処刑する決意をしている。ファシストのクーデターは，白色テロルには赤色テロによって応ぜられる場合にのみおさえることができるだろう。武装したファシストがプロレタリア闘士を殺りくするなら，プロレタリア闘争は容赦なくすべてのファシストを粛正せねばならない。ファシストが10人に１人のスト参加者を壁に並ばせるなら，革命的労働者は５人に１人のファシストを壁に並ばせるだろう。ファシストは武装しているのに労働者はそうでないから，労働者は始めは圧倒的な数に依存せねばならない。そして闘争の過程で敵から武器を奪いとらねばならない。コムニストはとくにドイツの占領地域において，防衛的闘争を独力ではじめ指導せねばならない。一般党員は来るべき闘争のために出来るだけ多くの非コムニスト労働者をかちとるためその努力を倍化することを要請する。「党は眞面目に闘争にそなえているすべての人と肩をくみ，プロレタリアートの指導の下に闘う準備をしている。前進せよ，ドイツのプロレタリアートの前衛の隊伍をかためよ，カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの精神の下に闘おう。ベルリン７月11日ＫＰＤ中央部」（ローテ・ファーネ1923年７月12号 Angress ibid p. 356－357）

このアピールはまるで激辛の唐がらしのような効果を与えた。それは他の中央部のメンバーを不意打し仰天させた。またこのアピールはトロツキーには「ドイツにおける革命的情勢の存在をつげる証固の一つ」とみなされた。[16)]

右派で慎重派のブランドラーにこのようなアピールを書かせた誘因として，アングレスはつぎのような挿話を紹介している。すなわちブランドラーはこのアピールを出したいきさつを戦後1952年に，つぎのようにオトー・ウェン

ツェル（Otto Wenzel）につげた。

1923年７月，ブランドラーが保養地に出かける前に，カールスルーエでさいきん開かれたナショナリストの会議のニュースをきいた。それによるとこの会議に前左派共産党員（例の悪名高い民族ボリシエヴィスト）フリッツ・ウオルハイム（Fritz Wolheim）が積極的に参加していた。そして一つの動議が出された。それによると右翼の武装蜂起が成功した場合，10人に１人のスト労働者を処刑する，というのであった。ブランドラーはこの報告に激怒し，さらにウオルハイムの裏切り行為にカンカンになり，直ちにこの「党へ告ぐ」というアピールを書き下したのだと告白したというのである。[17]

そしてこのアピールはＫＰＤの中央部で満場一致で採択され，翌７月12日付の「ローテ・ファーネ」に掲載されたのである。さらにこの同じ号の「ローテ・ファーネ」はＫＰＤがドイツ全土で「反ファッショ・デー」デモを行うことをつげていた。この日以降機関誌「ローテ・ファーネ」の論調はますます鋭く攻撃的になっていった。これは政府と大衆の間にコムニストのクーデターは近い，と危惧させるのに十分だった。社会民主党の機関紙「フォアヴェルツ」もその13日号で「内戦への行進」としてＫＰＤの計画を非難した。たしかに「ローテ・ファーネ」７月28日号は「われわれの時期はまだ来ていない。しかしみんなが信じているよりずっと近い」とけん制してはいたが。

ＫＰＤがこの「反ファシスト・デー・デモ」をもとうとした動機はこれによって権力獲得にのり出そうとしたわけでなく，「ＳＤＰと協力して労働者農民政府の樹立」を達成しようとしたものだった。[19] もし７月29日にコムニストが国内戦を企てたならこれを妨げるものは何もなかった。ただ党が望んだものは自分たちの力をテストしようとしたものであった。すなわち，民族主義者の力，政府の力，ＫＰＤの大衆への影響力をテストしようとしたものである，とエルンスト・マイヤー（Ernst Meyer）は述べているが，[18] これが多分真相に一番近いだろうとアングレスも同意している。[20]

しかし党外部のものにとってはＫＰＤが武装蜂起を企てている，と思われた。20日にはシュレジェンのブレスラウでユダヤ人系の食料店や衣料品店を

襲う暴動があり，さらにフランクフルトで７月23日に行われたコムニストの影響下のデモでは「流血なしには正義なし」「搾取者を絞首台に」といった過激なスローガンが出され，警官との衝突がおこった。

このフランクフルト事件は，国政府に地方州政府に対して計画された７月29日のデモの禁止を勧告させる口実を与えた。国政府は７月18日の政府声明で国民にたいし，内戦の危機は根拠のないものであり万一そのような事態が生じた場合には「権力手段をかしゃくなく投入する」と告げていた。ノスケ（Noske）が知事であったハノーヴァは，７月23日に，デモ禁止を布告していた。権力が独立社民に握られて，左派の支配下のザクセン，チューリンゲンと右翼勢力の牙城だったバーデンを除いてすべての州で戸外デモ街頭行進禁止令が出された。

こうゆう状況の下でＫＰＤの中央部はまたも意見の分裂と激しい討論の渦にまきこまれた。右派のブランドラーはザクセン，チューリンゲン，バーデンで武装プロレタリア百人隊のエスコートの下にデモを行うが，他の州では中止する，という方針を出した。ルート・フィッシャーら左派はベルリンでもデモを強行せよと主張した。ブランドラーは十分な防衛措置がある場合にのみデモを遂行できる。重要な問題であるから，コミンテルンの執行委員会に助言をもとめたい，としてモスクワに電報をうった。このときモスクワではレーニンは重病の床にふせり，左派に近い立場のジノーヴィエフ，ブハーリンは休暇で不在であった。（かれらの意見は政府の禁止命令を無視してデモを強行せよ，というものだった）トロツキーは十分な情報が不足している，という理由でコメントをさけた。そこでこれまでドイツ問題であまり発言しなかったスターリンの見解が鍵を握ることになる。有名なスターリンのジノーヴィエフ，ブハーリン宛のつぎの手紙である。

「共産主義者は（所与の状況においては）社会民主主義者なしに権力を奪うように努力すべきであろうか。（かれらはそのために十分成熟しているであろうか）――私のみるところではそれは問題である。われわれが権力をとったとき，ロシアには，(a)平和，(b)農民に土地，(c)労働階級の大多数の支持，

(d)農民の同情，といった条件があった。ドイツの共産主義者は，現在何らこの種のものを持っていない。もちろん，かれらはソヴィエト人民を隣人としてもつという，われわれが持っていなかった条件を持っている。しかし，現在の時点で一体われわれは何を彼らに与えることができるだろうか。仮に今ドイツで権力が倒れ，共産主義者がこれを拾い上げたとしても，それはたちまち崩壊するであろう。もっとも「旨く」いったところでそうだ。しかしもっとも「悪く」すれば――彼らは粉々に粉砕され撃退されるだろう。問題の核心は「大衆を教育する」というブランドラーの願望にあるのではない。問題の核心はブルジョアジーと右翼社会主義は，間違いなく予行演習のデモンストレーションを全面的に闘争に転じてしまい（現在もっともその条件が有利だ），共産主義者を粉砕するであろうということである。もちろん，ファシストは居眠りをしているわけではないが，ファシストに最初に攻撃させた方がわれわれに有利である。そうすれば全労働階級が共産主義者のまわりに融合するであろう（ドイツはブルガリアと違う）。さらに，あらゆる報告からみて，ドイツにおいてはファシストは弱い。私の意見では，ドイツの同志は抑制すべきであって，激励すべきではない。」[21)]

この「抑制すべし」というスターリンの意見をうけてラーデクは29日の行動を「抑制せよ」。もし街頭の行動が強行されるなら，それは1917年のロシア革命の場合の「７月敗北」と同様な結果にみちびくだろう，という電報を７月26日にＫＰＤ中央部にあてて送る。右派のラーデクは７月29日の「ローテ・ファーネ」に「ドイツ・ブルジョアジーの迫りくる破局」という論文の中で告げる。「総攻撃の時期はまだ到来していない。党の第一の任務は自己の傘下に労働者の積極的部分の大多数を組織することである。われわれは現在まだ弱いということを心中において抑制を続けねばならない……われわれは敵がわれわれを部分的に撃破することを許すようなことをさけねばならない」[22)]

こうして一つの大きな山場は見送られることとなった。それでも７月29日にはベルリンで20万人の労働者が屋内集会を行い，ザクセンのケムニッツで

は6万人の労働者が屋外集会をもった。そこでＳＰＤ左派傘下の労働者がコムニストとの協力の方に歩みよっていることがまざまざと示された。

第二章　クーノ・ストライキと危機の成熟

7月末から8月にかけてドイツの情勢はますます逼迫してきた。破局的経済情勢，天井知らずのインフレ，物価と賃金の乖離，食料品不足と餓死の切迫，がクーノ政府の支持基盤（中央党，民主党，国民党，バイエルン人民党）をゆるがした。7月27日付の中央党系の「ゲルマニア」紙は，「最も深刻な苦境の中で」（In höchster Not）と題する論説をかかげ，政府の財政政策を鋭く批判し，クーノ政府はもはや幻滅を意味するにすぎない，と断罪した。そして結論としてもっと強力な政府の樹立を要求し，国会が断固たる決断をもつ勢力を見出せないなら，「議会主義の命運は決するであろう」，「それとともにドイツ国民の命運をも決するであろう」，と断言した。与党のこのような鋭い政府批判は「爆弾の落下したような作用」を政府や政界に与えた。また7月28日の民主党の執行部会議では，同党系の実業家たち，メルヒオール（K. Melchior）とシャハト（H. Schacht）らが政府の財政政策の失敗を強く非難し，経済再建を要求した。

他面，このような危機の中で社会民主党の態度が変化してきた。レヴィ（P. Levi）ローゼンフェルト（K. Rosenfeld）らに指導される社会民主党左派の30名の国会議員は，7月29日，ワイマルで会議を開き，クーノ政府の打倒，如何なる「大連合」政府への参加にも反対，当面のプロレタリア的目標を達成するため出来る限り共産党と協力をする，と決議した。[23)]

8月8日に再開された国会の冒頭演説で首相クーノは国際情勢の困難をうったえ，逼迫した財政政策の改善のため税制の改革と食料問題の解決策を示した。そしてこのような時期における「内戦の企て」は犯罪であるとして「国内の統一」を訴えたが，もはや空しく，国会や国民の反応は冷たかった。

イギリスの外相カーゾンは8月1日の貴族院の演説で，ドイツの情勢を憂

え，つぎのように訴えた。

「われわれはドイツが打ち砕かれ，崩壊しつつあるのをみる。ドイツは恐るべき滅亡の状態にある。これはドイツにとってのみならず，ヨーロッパにとっても経済的な再建にかんするあらゆる希望を否定するような状況である。」[24)]

以上のように上層部はこれまでのように支配することが出来なくなった。そして下層部もまたこれまで通りに支配されることを拒否するにいたった。すなわち，「クーノ・スト」勃発である。

すでに８月７日，ベルリンの15経営レーテ委員会はベルリンの経営レーテ集会を招集し，翌日からの闘いの開始を呼びかけた。

国会の開会された８月８日，経営レーテの大きな運動がますます強力になった。大経営――アンビ，ＡＥＧ，ジーメンス・シュケルトなどーで従業員集会が開かれ，そこから派遣された代表は国会前の広場で集会を開き，クーノ政府退陣の決議を国会に提出した。

同日，ベルリンの印刷工組合は８月10日からストライキを開始することを決定した。この決定は上部機関であるＡＤＧＢ（ドイツ労働総同盟）により承認された。労働者新聞をのぞいてすべての印刷所は仕事をしないことが決められた。ＡＤＧＢの執行部は，政府印刷局を除外するよう望んだが，この案は拒否された。ＫＰＤの強い影響下にあった政府印刷局はいっせいに仕事をストップした。したがって新たな紙幣の印刷も止まった。

８月10日，まさにベルリンは「真の精神病院」と化した。（アングレス，前掲370ページ）

15委員会のアジテーターは市の公共企業に派遣され，発電所の従業員をまきこむことに成功した。ベルリンの電力供給が一時停止し，市の運行は混乱する。建築労働者，市の運輸，電力，ガスの運行が一時機能を麻痺させた。10日発行の「ローテ・ファーネ」紙は，一面に「クーノにたいする巨大な嵐」（Massensturm gegen Cuno）という見出しをつけていた。

政府は「公共秩序維持のために」という命令を出し，平和をみだし，現在

の国家秩序の暴力的破壊を主張し示唆するすべての印刷物は，直ちに没収する，と告げた。

この日ベルリン労組委員会は，地方の労組の幹部や，社会民主党，独立社会民主党，共産党の代表を招集し協議会を開いた。ＫＰＤの代表（左派ルート・フィッシャーをふくむ）はつぎのような目標の下に３日間のゼネストを行うことを提案した。最低限時給 0,6金マルク，クーノ政府の打倒，労働者・農民政府の樹立がこれである。このＫＰＤの提案は代表の多数にうけ入れられる雰囲気だった。しかしこの提案が投票される直前に，ＳＰＤの代表が国会におけるＳＤＰの代表は政府よりつぎの確言を得た，と述べた。すなわち５千万金マルクが緊急の食料輸入にあてられる。インフレを阻止するため２億金マルクが使われる。またこの日には，所得と大企業の税金を上昇させる法律案が通ることになっている，と。こうしてＫＰＤ提案は拒否されてしまった。

８月11日，ワイマル共和国の「憲法デー」に，ベルリン市工場レーテの会議が開かれ，ゼネストを宣言し，国の他の地域もストに合流するように要請した。この宣言は「ローテ・ファーネ」特別号に掲載されたが，直ちに政府により没収された。しかし，ＫＰＤの主導するゼネストは各方面に広がり，1920年のカップ一揆のさいの情勢をほうふつとさせるものとなった。約300万人の労働者がストに参加した。まさに革命的情勢が出現したかにみえた。デモと警官との衝突によって12日に30人，13日には110人の労働者が殺された。

しかし，８月11日，社会民主党のクーノ政府不信任案をうけて，８月12日にはついにクーノは辞任した。13日大統領エーベルトは，ドイツ人民党のグスタヴ・シュトレーゼマン（Gustav Stresemann）に組閣を命じた。シュトレーゼマンは中央党，ドイツ民主党のブルジョア政党とともに社会民主党をだきこんで大連立政府を樹立することに成功した。すなわち社民のロベルト・シュミット（Robert Schmidt）ルドルフ・ヒルファーデイング（Rudolf Hilferding）ウイルヘルム・ゾルマン（Wilhelm Sollmann）グスターヴ・

ラドブルッフ（Gustav Radbruch）の４人が入閣した。

こうしてクーノ政府崩壊とともにストライキ運動もしだいに衰え自然崩壊する。８月14日，ＫＰＤはストの「自然発生的統一的」中止を告げた。ゼヴェリンクの警察権力は15委員会を弾圧し，８月16日には国の工場レーテも禁止した。ラーデクは告げる。

「それでもなお，シュトレーゼマン氏の登場が運動の一定期間休止する一つの段階を意味することは可能である。

ドイツの共産主義者は，この時期を利用してより組織をかため，労働者階級の大多数を勝ちとり，行動の統一形態をつくり出し，それによって小ブル大衆の中に入りこみ，かれらをプロレタリアートに結びつけるだろう」。[25)]

ＫＰＤは８月14日，スト中止を訴えるとともに「ドイツ勤労大衆に告ぐ」というアピールを出した。このアピールでは日和見主義労組幹部や社民を非難した上で，「闘争は休止された。つぎの闘いにそなえよう」「闘いは中断したが，終りではない」と強調している。

この中止についてルート・フイッシャーはつぎのような事情があったとのべている。すなわち，ブランドラーはこのゼネストが「ＡＤＧＢの公式承認の下に行われたものでなかったからだ」と中止の理由をのべている。[26)]

ワルター・ウルブリヒト（Walter Ulbricht）は，この中止を「中央部における日和見主義者と裏切り者……ブランドラー，タールハイマーらがこのストに明確に政治的目的を与えることを怠り，労働者政府の樹立を要求することに失敗したからである」[27)]断罪している。

シュトレーゼマンは，「クーノより深い経済的知識をもち」，「政治的にはぬけ目ない男で，とくに外交について必要な不人気の政策を断念する勇気をもっていた」。[28)]かれはドイツの直面する難問に着々と手をうった。かれはまずフランスと交渉してルール占領問題を解決した。

イギリスは８月11日，カーゾン・ノートで「イギリスはルール占領を国際法にもとるものとみなす」とフランス，ベルギーに通告していた。８月21日にはフランスのポアンカレー首相はドイツが受動的抵抗政策をやめるなら，

ルール占領を徐々に段階的に中止する意志がある，と声明した。これを受けてシュトレーゼマンは9月24日に閣議の了承の下に，9月26日，「消極的抵抗」を中止すると宣言した。また8月23日には労働者代表と経営者代表に賃金問題の協定を結ばせることに成功した。かれは9月2日には通貨改革を実施し，レンテン・マルクを導入することによって暴走するインフレを収束させる方策をとった。同時にエーベルト大統領と計って，ドイツ全土に「非常状態」を宣言させ，オト・ゲスラー国防相に執行権を与えた。したがって重大な危機はまだ残っていたとしても「1923年危機の頂点は，8月12日に通過していたが，同時代の人々はこの事実を当時はきづいていなかった」とアングレスは正当にも述べている。[29]

第三章　武装蜂起の準備

ドイツのクーノ・ストライキは「革命の司令部」モスクワのコミンテルンの指導者たちに衝撃を与えた。こうして武装蜂起，「ドイツの十月」の方向への急転換がおこる。

もともとコミンテルンの指導者の間では，「即時行動派」と「抑制派」に意見が対立していた。ジノーヴィエフ，トロツキーは前者であり，ラーデク，スターリンは後者であった。ＫＰＤ内でも，ルート・フィッシャー，マスロフら左派は前者，ブランドラー，タールハイマーらが後者であった。

したがってさきに述べた8月20日の論文で指摘したようにラーデクはシュトレーゼマン政府の出現とともに「運動の一時停止」を訴えていた。

また同様にタールハイマーもシュトレーゼマン政府樹立について，こうのべている。「シュトレーゼマン政府の樹立は，労働者と農民政府のための闘争を労働者階級のかなりの数が希望していないことを示している。政治的かつ組織的に労働者階級の勝利を確保するための条件が成熟するまで，われわれは長い道をすすまねばならない。……将来もたらされるものは，現政府の庇護と部分的協力の下における右翼の独裁であろう。」[30]

これに反しコミンテルンの議長ジノーヴィエフは「決定的時期が来た」とみなし，８月15日に「ドイツの情勢とわれわれの任務」というテーゼをかき，つぎのように述べた。

「危機は熟した。決定的事件はさし迫っている。ＫＰＤの活動と全コミンテルンの活動は一つの新しい決定的瞬間に入った。ＫＰＤは急速かつ断固として近づきつつある決定的革命的危機にそなえねばならない。

危機は熟した。賭は途方もなく大きい。われわれはますますその瞬間に近づいている。そのときには勇気，勇気，さらに勇気が必要である。」[31)]

タールハイマー論文と同じ日にかかれたトロツキーの「全世界のプロレタリアートへのアッピール」はつぎのようにのべる。「ドイツの情勢は，さらに尖鋭化している。すべての兆候が偽りでない限り，革命はさし迫っている。ドイツのプロレタリアートは，ドイツ・ブルジョアジーの武装力と直面せねばならぬだけでなく，同時にブルジョアが攻撃を始めたとき，協商国のブルジョアジーとその従僕がドイツ・ブルジョアジーとのあつれきを忘れて，その支援のためにかけつける危険が存在する。」[32)]

アングレスは「ドイツで共産革命を工作しようというコミンテルンの決定は大部分まちがった前提にもとづいていた」[33)]と断罪しているが，この「ドイツの十月」の工作は，コミンテルンとＫＰＤにおいてどのように行われたかをつぎに見てみよう。

８月23日，ドイツ革命の問題を細部にわたって決めるためロシア共産党政治局の秘密会議がモスクワで開かれた。この会議の唯一の入手可能な資料であるバシャノーフの「わたくしはスターリンの秘書だった」[34)]によるとそれはつぎのとおりだった。

ロシア共産党の政治局員，同候補の休暇が取り消され，トロツキー，カーメネフ，ジノーヴィエフ，スターリン，ルイコフ，トムスキー，ラーデク，ビヤタコーフ，ツリユーパが出席した。モスクワにおける常駐のＫＰＤ代表ヤーコブ・ワルヒャー（Jakob Walcher）とエドウイン・ヘルンレ（Edwin Hörnle）もまたこの会議に呼ばれた。[35)]

コミンテルン執行委員会のドイツ問題の専門家であるラーデクがまず発言した。かれはドイツにおける革命的気分の急速な増大についてのべた。そして出席した政治局のメンバーにコメントを請うた。トロツキーがまず発言した。かれはすでにクーノ・ストと新シュトレーゼマン政府について，より多くの情報を得るためＫＰＤのアウグスト・エンデルレ（August Enderle）とヤーコブ・ワルヒャー（Jakov Walcher）を保養地の南ロシアに招いてドイツ情勢を検討していた。かれは断固としてＫＰＤに革命の準備をやるよう激励すべきだとのべた。「永続革命」論者たるトロツキーにとってドイツ革命こそ，かれの本願であり，ドイツ革命の昂揚はその理論の実証するものであった。かれは力強く熱狂的に演説をした。「おこりつつある出来事は巨大な意義をもっている。ドイツ革命は資本主義世界の崩壊を意味している。……われわれはドイツ革命を賭けているだけでなく，ソ連の生存をもかけているのだ。ドイツ革命が成功すれば資本主義ヨーロッパは，それを我慢できないであろう。その時，かれらは革命を武器の強力によって抑圧しようとするだろう。われわれは，その全力を闘争にそそがねばならない。何故ならこの闘争の結果がすべてを決定するからだ。われわれが勝ちとって世界革命の勝利を確実なものにするか，われわれが失って，世界のさいしょのプロレタリア国家とロシアにおける，われわれの権力を失うか，のどちらかである。すなわち，われわれは巨大なエネルギーを発揮せねばならない。われわれの準備はひどくおくれている。ドイツ革命は進軍している。諸君その鉄の歩みが聞こえないか。大波の高まりがどれ程高く上っているかみえないか。われわれは急がねばならない。破局が不意打をしないように。諸君，それがほんの数週間の問題であることを悟らないか。」[36)]

８月15日のテーゼを提起していたジノーヴィエフはトロツキーの意見には一般的に同意したが，時期の問題では異論を出した。そしてそれは数週でなくて数カ月の問題である，とした。

スターリンだけがドイツ変革が切迫しているという意見に疑問をなげかけ，年末かあるいは翌年におこるだろうと短い発言をした。

しかしのちにスターリンもまた抑制論から積極論へ見解を変える。「ローテ・ファーネ」10月10日号に掲載された同紙の主幹タールハイマー宛のつぎの手紙である。

「親愛なる同志タールハイマーへ

迫り来るドイツの革命は現代におけるもっとも重要な世界的事件である。ヨーロッパやアメリカのプロレタリアートにとってドイツにおける革命の勝利は6年前のロシア革命の勝利よりもより大きな重要性をもつものだろう。ドイツのプロレタリアートの勝利は疑いなく世界革命の中心をモスクワよりベルリンへと移すだろう。『ローテ・ファーネ』は真の勝利を祝うことが出来る。何故ならそれは，これまでドイツのプロレタリアートに勝利への道を示し，またヨーロッパのプロレタリアートの指導権を再確保することを助ける確固たる燈台であった。わたくしは心の底からローテ・ファーネがプロレタリアートの権力獲得のため，生れようとするドイツの統一と独立のための来るべき闘争での新しい決定的勝利をうることを望んで止まない。

J・スターリン」[37]

この政治局会議は，意見の違いにもかかわらず，ジノーヴィエフのテーゼを承認し，あらゆる手段をこうじてドイツの革命運動を支持することを決定した。そしてドイツの行動の準備を監督するため，つぎの4人からなる委員会を設置することを決めた。

ラーデク――ＥＫＫＩの代表，ＫＰＤの中央部との連絡。

ピヤタコーフ――アジテーション部門を受けもち，モスクワと連絡を保つ。

ウンシュリフト――秘密警察の高官でのちに陸軍省コミッサール候補，任務はドイツにおける「赤軍」派遣部隊の結成の監督。

ワシリー・シュミット――労働省コミッサール。ドイツの労働組合に革命的細胞を組織する任務をもつ。

のちに第5番目の委員として駐独大使ニコライ・クレスチンスキー（Nikolai Krestinsky）が加わった。かれは革命の準備のための秘密資金を取り扱う任務をもつ。

この政治局の熱気がソ連全土に広がっていった。「ロシアの労働者階級は，ドイツ革命のためにその賃上げを保留し，必要ならば，賃下げもこばまない」という報告が，ＥＫＫＩにされていた。ソ連の国民にはドイツのプロレタリアートの敗北は同時にロシアの労働者の敗北である，と告げられていた。婦人たちは公式の会合でドイツ革命のために結婚指輪その他貴重な装飾品を寄付すると申し出た。6,000万プードの穀物がドイツへ送るため集められた。ロシア共産党政治局の命令でドイツ語の話せる党員をリスト・アップし，適当な時期にドイツへ派遣され革命を助けるための共産党員の訓練された予備部隊がつくられた。十月には「労働者ドイツとわが労働者，農民同盟は平和と労働者の砦である」「ドイツのスチーム・ローラーとソ連のパンが世界を征覇する」といったスローガンが掲げられた。雰囲気にいつも弱く「流れにまかせる」ラーデクはたちまち，それまでの慎重論を捨ててジノーヴィエフ，トロツキーに同調した。

８月末～９月始めにドイツからブランドラー，マースロフ，テールマン，フィッシャーがモスクワによばれた。そして９月一杯モスクワで討論が続いた。ブランドラーは困難な立場に立たされ，ためらった。ラーデクが意見を変え，ジノーヴィエフはテーブルをたたいてわめき，トロツキーは，ボリシェヴィキにとって1917年10月に正しかったことはドイツのＫＰＤにとっても1923年10月には正しい，として武装蜂起の日取りを正確に決めるよう求めた。マスローフとフイッシャーは早ければ早い程よいとのべた。

ブランドラーは蜂起の日を決めることに反対し，プロレタリア革命の展望にたいして疑問を表明した。しかしボリシェヴィキの指導者たちとＫＰＤ左派の同僚の反対にあって，孤軍奮闘することに疲れ果て，しぶしぶ意見をかえた。こうして武装蜂起のプランがつくられた。

それによると社会民主党左派とＫＰＤが多数を握るザクセンとチューリンゲン[38]が出発点である。ＫＰＤの代表はまずこのザクセンとチューリンゲンの政府に参加する。そしてこの両州の警察機構を握ることにより，武器を確保する。そしてバイエルンの反革命と北のファシストの攻撃に対処し，そ

の両反革命の間の障壁となり，全国の大衆動員を行う。中独を確保することによってバイエルンを封じこめながら，全部隊をベルリンへ送る，というものであった。ブランドラーはこの方針にも一応疑義を出した。のちにアイザック・ドイッチャーとの交信でかれはつぎのようにいっている。

「わたくしはザクセン政府は労働者を武装するための武器を貯えていない，と抗議した。というのはカップ一揆以降すべての武器はザクセンや近隣諸州からとりあげられていた。警察官もまた武装していなかった。警察が必要なときはベルリンから少しづつ送られるだけだ，と説明した。これに対してジノーヴィエフは威嚇し，こぶしでテーブルをたたいた」。[39]

ブランドラーはコミンテルンの指導者に屈伏しながらなお心中で抵抗していた。かれはザクセン，チューリンゲンの社共連合政府にＫＰＤが入閣するためには，大衆の政治的動員が先行すると考えていた。[40]

ブランドラーはまたその疑問を公然と示した。９月に開催されたポーランド共産党大会で，かれはつぎのように発言している。

「1918年～19年には２万人の軍隊の犠牲者が出たのに反し，今回の犠牲者は数十万人にのぼるだろう……今回は50万のよく組織され，武装したファシストだけでなく外に50万人の国防軍その他反革命と直面しなければならない」[41]

しかし，ブランドラーはおしきられ，コミンテルンの指導者たちに屈伏した。この屈伏はのちにピーク（Pieck)によって，「ブランドラーは９月のモスクワ滞在中に，ドイツ情勢のまちがった映像を与え，また革命的蜂起の勢力と可能性について誤りを犯した」と断罪されることになるのである。[42]

トロツキーが固執した蜂起の日付はさいしょロシア革命の記念日である11月７日に，のちにドイツ革命の記念日の11月９日に決められた。しかし，一定の日を定めることにたいするブランドラーのつよい反対でジノーヴィエフは，妥協をはかり来る４乃至６週間内のある日と最終決定をした。

軍事的準備のため，秘密機関がつくられた。それは国内戦のベテランＰ．スコブフレフスキー将軍（Pëtr Alexandrovich Alexis Skoblevsky）を長

とする専門家の顧問団である。また情報機関，テロル部隊，赤軍が結成されることになった。赤軍の基礎は現存のドイツのプロレタリア百人隊があてられる。ドイツは六つの軍管区にわけられ，各管区はロシアの軍事顧問に援助される党幹部にまかせられる。スコブレフスキーはエルンスト・シュネラー（Ernst Schneller）を長とする党軍事評議会によって支援される。

ついでスコブレフスキーの軍事組織と並んで作動するグーラルスキー・クライネ（Guralski-Kleine）を長とする「革命委員会」がつくられた。情報・テロル部隊は，ベルリンのソ連大使ニコライ・クレステンスキーとコミンテルンの国際連絡部（ＯＭＳ）のヤーコフ・ミロフ・アブラーモフ（Jacob Mirov －Avramov）の監督下に入ることになっていた。

ブランドラーはドイツ革命の最高指令官を決めてほしい，とジノーヴィエフとトロツキーに申し出た。そして自分は到底「ドイツのレーニン」ではないから，トロツキーにその役割を引き受け，ドイツへ来てザクセンかベルリンで最高の責任者となってほしいとのべた。トロツキーはその気になった。しかしすでにレーニンの後継者をめぐり反トロツキーの党内闘争が燃え上っていたのでトロツキーの敵――ジノーヴィエフとスターリンがこれを拒絶し，四人委員会が最高責任をとることになった。

こうして９月末までにはすべての決定がなされた。ブランドラー，ルート・フイッシャーはドイツに帰国する。（マースロフは前歴に対する不信があり，その審問にかけられるためモスクワにとめおかれた）

ルート・フィッシャーはブランドラーの出発の模様をつぎのように書いている。

「わたくしがクレムリンを去るとき，トロツキーがブランドラーに極めて異例の丁重なジェスチュアで別れの挨拶をするのをみた。トロツキーは，クレムリン内の自宅よりトロイツキー橋までブランドラーと同行していた。かれらは秋の午後の明るい陽ざしの中に立っていた。ブランドラーはプレスされていない背広を着ていた。トロツキーはぴったり合った軍服を優雅に着こなしていた。さいごの言葉を交したのち，トロツキーはロシア風にブランド

ラーの両頬にやさしく接吻した。わたくしは二人ともよく知っていたのでトロツキーが真に感動しているのがよくわかった。偉大な出来事の前夜にドイツ革命の指導者に自分の希望を託したと感じられた」[43]

10月1日，ジノーヴィエフは，ＥＫＫＩの名の下にＫＰＤ中央部へつぎのような電報をおくった。

「われわれは情勢を，決定的瞬間が5～6週以内に来ると評価するので，われわれの目的に即時役立ちうるすべての部署（ポスト）を直ちに占拠する必要があるとみなす。この情勢にもとづいてザクセン政府への入閣の問題にたいし，実際的条件の下でアプローチせねばならない。ツアイグナー一派がバイエルンやファシストからの攻撃を真に防衛するという条件の下でわれわれはザクセン政府に入閣する。5～6万人の労働者を直ちに武装させよ，ミュラー将軍を[44]無視せよ。同様のことをチューリンゲンでなせ」[45]

このようなコミンテルンの指令の下にドイツ国内の準備もととのえられた。

ノイベルク「武装蜂起」（A. Neuberg; Armed Insurrection NLB p. 16）によるとそれはつぎのとおりだった。ドイツで武装蜂起の決定がなされたのちＫＰＤの中央委員会は軍事的政治的指令部（MP－Oberleiter）をつくった。国防軍の六歩兵師団に対応して，革命側の六部隊はつぎのように配置されていた。ベルリン軍管区，北西部管区，西部管区，南西部管区，中央管区（ザクセン・チューリンゲン）東部軍管区である。

ヘルマン・レンメレ（Hermann Remmele）が中央委員会と全国指令部との連絡責任者であり，また西部，北西部，南西部の政治的軍事的指導部との連絡も引き受けていた。また三つの軍管区の政治書記と軍事政治指揮官はつぎのとおりだった。（他の三管区は不明）

北西部	政治書記	フーゴー・ウルバンス（Hugo Urbans）
	軍事政治指揮官	アルベルト・シュライナー（Albert Schreiner）
	ソ連の将軍	スターン（Stern）
南西部	政治書記	エルンスト・マイヤー（Ernst Meyer）
	軍事政治指揮官	エリッヒ・ウオーレンベルク（Erich Wollenberg）

	ソ連の将軍	アレクセイ・N.ステツキイ（Alexei N Stetzky）
西　部	政治書記	アルツール・エーヴエルト（Arthcer Ewert）
	軍事政治指揮官	ウイルヘルム・ツアイサー（Wilhelm Zeisser）
		本名不明　通称「アゴ男」

その機能は国防軍を撹乱することにあった。

こうして武装蜂起の技術的組織的準備は表面的には完了する。モスクワでは革命的熱狂とオプティズムがみちみちていたが，しかし政治的準備はまったく不十分であった。

楽観的熱狂にみちてジノーヴィエフは10日にかく。

「都市では労働者は数的に絶対的に優勢である。……来るべきドイツ革命は古典的なプロレタリア階級の革命である。2,400万のドイツ労働者は国際プロレタリアートの基本的中核を形づくっている。かれらは国際革命の基本財産をなす……来るべき決定的事件では700万の農業労働者はまたドイツの地方農村にたいして消し去ることの出来ぬ刻印を与えるだろう。」[46]

しかし実際の準備はほんとうははかばかしくなかった。プロレタリア百人組は100,000人と称されたが，全員が武器を持っているわけではなかった。別の数字では10月には800の百人組がおりその三分の一がザクセンにいたといわれる。(Die Internationale vl 18 (30 Nov. 1923) S 524)

11月 3 日の中央部の会議では11,000丁のライフルがあったとされたが(Gast; Hundertschaften p. 452)，実際の参加者のワルター・ツオイフェルの報告では，50,000丁といわれている。(W. Zentschel; lm Dienst der Kommunistischer Terror－Organisation Berlin 1931, p. 13)

第三章　死産した「ドイツの十月」

ロシアの十月革命の記録者で「世界を震撼させた十日間」の著者ジョン・リード[47]と同様の役割をドイツ革命について果したラリサ・ライスナー[48]（Larissa Reisner）は『十月のベルリン』[49]の中でつぎのように書いている。

「ベルリンは飢えている。毎日のようにひとは，街上で，市電の中で，店々のまえの行列のなかで，衰弱しきって倒れるひとびとを助け起こしています。空腹の車掌が市電に乗務し，空腹の運転士が地下鉄のぶきみな闇をとおって車輌を疾駆させ，空腹のひとが働き，空腹のひとが昼も夜も公園のなかを，また労働者街を，仕事もなくうろついている。……

疾過する電車に背面を向けた建物の壁は，広告ポスターで蔽われている。そこにはかつての栄華がまだみえを張っていて，砂糖いりの濃いコンデンスミルクの罐がはばをきかせていたり，お尻のようにまるいバラいろの頬をした子どもの大きな姿が，街灯の柱ほどもある板チョコを都市の上にふりかざして，かわいらしく笑っていたりする。けれども，ほんものの子どもは空腹のあまり，もう学校に行っていない。母親に連れて行かれると，子どもたちは教師に向かって，授業中に気分が悪くなったから家に帰らせて，と頼むのだ。朝にも前日の晩にも何も食べなかった子どもが，どうして授業の終わりまでもちこたえられようか？……

職がない！1週間や1カ月ではなく，1年も，1年以上も，むろん妻もあれば，何人もの子をかかえた者がそうなのだ。痛めつけられ，踏みにじられた者にはその上，病気とか怪我とかの無数の災厄がふりかかってくるし，そういう者は，偶然的に提供される一片のパンを奪い合わねばならぬとき，ふいに弱気に見舞われたりもする。しかし，生計の手段を奪われて零落しきった小ブルジョワ大衆は，ひどい困窮にもかかわらず，いまだにあくせくと順応につとめ，なんとか『悪い時代』を凌ごうとしている。かれらは節約し，明日になれば無一文にひとしくなる金を貯めて，貧乏だが勤勉でまじめな生活の外観だけは保持しようと，何もかもがまんしている。苦労してタダ働きをしながら，3日に一度あきれた金額を吐き出す会計課の窓口に身を寄せて，資本家の金をずっしり詰めこんだどっしりした耐火金庫を眺め，それを近ずく革命にたいする防壁と感じている。

小ブルジョワはいまだに，ジーゲスアレーに立つ大理石像のようなバカが，武器を手にしてドイツ国民を，左のアナーキーや，右のクーデターや，搾取

から守ってくれるのを期待している。アスファルト舗装の快適なドイツの都市には絶望が拡がり，下っぱのサラリーマンや公務員は，四つん這いで歩いて獣のように吼えたいくらいなのだが，そんなかれなり，かの女なりは，けっきょくは街頭に出ず，喫茶店に行ってしまう。喫茶店に行き，1週間に稼いだ紙幣のありたけを，一杯のコーヒーに使ってしまう――ものういワルツや，バロックふうに飾り立てた椅子や，タバコ，サッカリン，娼婦の優雅な帽子などがかもしだすイリュージョンによって，にじみでる健全な怒りをごまかすために。

けれども，飾り棚などないところ，金もなくパンもないところがある。ほんとうの労働者の住居である。失業した夫はぶらぶらし，妻は福祉施設を訪ね歩いている。その妻がその上妊娠していれば，医者がかの女の重たげなからだを診察し，かの女同様に空腹の，しかし勤務に精励する看護婦が，かの女の名を貧民台帳に記入して，かの女にこう告げるのだ。たぶん2カ月もしたら，乳児用ミルクの25パーセント割びき券もらえるでしょう，と。」

ジノーヴィエフの電報が到着するとすぐザクセンのツアイグナー政府とＫＰＤの間の話し合いが始まった。ザクセンとチューリンゲン政府に参加する，というＫＰＤの意図は，10月5日には公表された。ヘルマン・レンメレ（Hermann Remmele）は，10月8日，国会の議員総会でこのことを報告した。ブランドラーは，この日ドイツに到着した。かれは直ちにドレスデンへ赴き，翌10月9日よりの討議に加わった。10月9日～10日にバイエルンとチューリンゲンでナチスとプロレタリア百人隊との衝突がおこった。右翼の脅威を鋭く感じとっていたツアイグナーは社共連合政府をつくる用意があった。

ＫＰＤと組んで右翼クーデターの危険をさけるというツアイグナー及び社民党左派の思惑と連合政権を全国蜂起のスプリングボードにしようというＫＰＤの意図には明らかにくいちがいがあった。

10月12日ブランドラーは内閣官房長官（Ministerialdirektor）に，パウル・ベトヒァー（Paul Bötcher）は財務長官に，経済長官はフリッツ・ヘッケルト（Fritz Heckert）に決まり，連合政府が成立した。ＫＰＤは警察を統

制できる内相を要求したが，これはツアイグナーに拒否され，間接的に警察に影響を行使しうる内閣官房長官で満足した。

チューリンゲンでも同様の話し合いが社民左派とＫＰＤの間で行われ，16日にＫＰＤのカール・コルシュ博士（Karl Korsch）を教育相に，アルビン・テナー（Albin Tenner）を経済相にして，連合政府が成立した。ＫＰＤの中央部は労働者に武装をかため，「国内と外国のすべての勤労人民の政府を樹立する準備をせよ」という訴えを回覧した。

ザクセンの連合政府の樹立された翌日，10月13日に軍管区指令官アルフレッド・ミュラー（Alfred Müller）はプロレタリア百人隊もしくは類似の組織を禁止する，という命令を出した。ザクセン政府は直ちに強く反論していった。「プロレタリア百人隊は憲法に忠実であり，如何なる攻撃からも共和国を防衛するものである」，とのべた。財務長官パウル・ベトヒャーはライプチッヒで演説し，すべてのプロレタリア百人隊を直ちに武装させよと叫んだ。ザクセンのプロレタリア百人隊の大会を10月13・14日に非合法裡に開くことが決った。

10月13日，国会は全権授与法を民族派とＫＰＤの反対を押し切って通過させた。10月13日にはザクセンの警察をツアイグナー政府の統制下より直接国防軍の支配下においた。チューリンゲンでは10月17日，ワルター・ラインハルト（Walther Reinhard）将軍によって，ゼネストが禁止された。

ツアイグナーがプロレタリア百人隊解散を拒否したとき（10月17日ミュラーの最後通牒，10月18日ツアイグナーのザクセン議会での返答）シュトレーゼマン政府は，国防軍をザクセンとチューリンゲンへ派遣することを決定した。しかも中央政府は10月20日「ザクセンを右翼急進的バイエルン軍の攻撃よりまもる」ためであって，ザクセンに敵対行動をとるためではない，とツアイグナーに告げていた。そして10月21日，国防軍がザクセンに侵入した。国防軍の侵入の準備についての報導は10月20日にザクセンのＫＰＤへ届いた。ＫＰＤの指導者たちは翌日ケムニッツで開かれる工場レーテ会議で党外の労働者の気分をテストしようときめた。ＫＰＤの支援者の多いこのケムニッツ会

議でゼネストを提案し，これを全国的蜂起の合図にしようと企んだのである。

問題のケムニッツ会議は，計画どおり10月21日に開かれた。66名のＫＰＤ代表以外に，工場レーテの代表120名，労組代表122名，統制委員会の代表79名，工場委員会の代表79名，行動委員会の代表15名，失業者代表16名，ＳＰＤ代表７名，ＵＳＰＤ１名という構成だった。基調報告者は社民の労相グラウベ，財務長官ベトヒャー，経済相のヘッケルトであった。三人はそれぞれ食料不足の恐るべき状態，財政の破局的状態，失業者の悲惨な状況について報告した。報告に続いてザクセンの政治的危機が討論された。軍事独裁の脅威と抗せよ，という要求と抗議の手段としてゼネストの宣言をせよ，という主張が出された。

つづいてブランドラーが登壇した。それまでの会場の空気よりして，かれの提案は賛成の拍手で受けとられるとかれは考えた。そこでかれは単刀直入に，直ちにゼネストを宣言せよと呼びかけた。だがブランドラーの提案は冷い沈黙でうけとめられた。明らかに代表たちはこんなに急迫した決定をする用意がなかったのである。会衆の当惑の数分後，ザクセンの労相グラウベが立ち上って，共産党員がこの提案を固執するなら，自分と他の６名のＳＰＤ代表は会議を退場する，と宣告した。このグラウベの言葉に抗議の声はまったく上らなかった。グラウベはゼネストの展望を研究するため社・共同数からなる特別小委員会を設置せよという動議を出した。この動議は採択され，小委員会が設置された。

この小委員会は数刻後報告を出して，同じく同数からなる行動委員会の設置を提案した。この行動委員会はゼネスト宣言にかんして協議するため労働者の諸政党，労組，ザクセン政府と接触を保つこととなった。しかしこの行動委員会は活動することなく終った。中央の国防軍が実弾を充塡した銃をもち，旗をひらめかせバンド演奏つきで進軍してきたからである。

その日の夕刻，ケムニッツ会議の終了後直ちにＫＰＤの中央部は会議を開いた。若干の国会議員やソ連より来た顧問も出席していた。ラーデクと３名の監督者はまだドイツに到着していなかったので出席できなかった。ラーデ

クの欠席のままこの会合は広範囲の蜂起は，現状勢下では危険である，として計画された武装蜂起の中止を満場一致で決定した。翌日ブランドラーはこの決定を到着したばかりのラーデクらに諮り了承を得た。ラーデクは少しこの決定をとりつくろうために武装蜂起と切り離して，ゼネストだけでもと申し出たが，ＫＰＤの左・右両派によって拒否された。左派のルート・フィッシャーは蜂起に導かれるゼネストを要求し，右派のブランドラーは現在の状勢下ではあらゆるゼネストは必ず武装蜂起になるだろうとのべた。こうして何らの協定にも達せず，事実上何もしない，ということになった。「ドイツの十月」は死産し，挫折したのである。

アルベール（R. Albert）という匿名でパリのクラルテ（Clarté）誌にかかれたコミンテルンの一ジャーナリストのつぎの記事が1923年の闘士たちの希望のこの突如とした断絶の心理的状態をきわめてまざまざと表現している。

「100万人の革命家は攻撃の合図をまっていた。かれらの背後には数百万の失業者，飢え，絶望的になった人々がいた。……この群衆の筋肉はすでにはりつめていた。こぶしはかれらの武器を握りしめていた。……そして何事もおこらなかったのだ」。

第四章　ハンブルクの武装蜂起

この「死産したドイツの十月」の中で，一つだけ悲喜劇的な挿話があった。10月24日～26日のハンブルクにおける蜂起である。

10月21日のケムニッツ会議後の蜂起中止決定がハンブルクにだけどうして届かなかったのか。またこの武装蜂起の指導者として脚光をあび，やがてＫＰＤの党首となるエルンスト・テールマンは，本当にこの蜂起を指導したのか。

第一の点は，諸説いろいろあって「ハンブルク蜂起の正確な理由は多分わからないだろう」とフォークスはその「ワイマル共和国下ドイツにおける共産主義」の中で指摘している。（前掲書107ページ）

アングレスはつぎの諸説を列挙している。(Angress ibid. p.444〜446)

第一にハンブルクの党組織の指導部が単独で蜂起をきめたという説。(ダナー)[50]

つぎは中央部の使者説。ケムニッツ会議の失敗後，中央部はザクセンでなくハンブルクで蜂起を開始することを決定した。第一の使者が蜂起開始の命令をハンブルクに送った。しかしすぐあとで中央部は意見を変えて，蜂起中止の命令を送った。しかしこの第二の使者は，遅すぎてすでにハンブルク蜂起は始まっていた，という説。この第一使者はケムニッツ会議をあまりにも早く出発しすぎた。これにはテールマンの激しやすい性癖があった。しかしすべての使者が鉄道駅で止められ，レンメレだけがハンブルクへ着いた。中止命令をもった第二の使者はハンブルクの党組織と接触することができなかった。こうして蜂起が始まった。レンメレもテールマンもブランドラーの指示をきく前にハンブルクへ出発していた，というものである。[51]

また中央部は10月20日にハンブルクを蜂起の先兵にすることを決定し，ハンブルクのテールマンに使者がおくられ蜂起が始まった。テールマンはケムニッツではなくハンブルクにいた，という説。

つぎにテールマンの役割についてもアングレスは「テールマンは中央部の左派反対派の代表の一人であった。しかしかれは決してハンブルクの指導的指揮官ではなかったし，蜂起の指導精神でもなかった。戦後東ドイツで事件の真実をねじまげて，かれをそのような地位につけ役割をおわせる伝説がつくられた」としている。(たとえばウルブリヒト「ドイツ労働運動の歴史によせて」Zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. S,139−148)

事実を調べてくると明らかにアングレスの指摘は正しいと思われる。

粗野で理論的水準も学識も低いテールマンは，1925年10月以降ＫＰＤの議長になった。1928年ウィットルフ（Wittorf）事件〔ハンブルク地域の書記のウィットルフが20000マルクの党資金を盗んだ事件〕の処理にあたって，かれはこれを公表せず，ひたすらおおい隠そうとした。そこでＫＰＤの中央委員会は1928年９月26日，万場一致でテールマン反対の投票をし，かれを罷

免しようとした。しかし10月1日スターリンが介入し，強い圧力をかけたため，その地位にとどまることができたのである。(F. Claudin ; The Communist Movement, Penguin Books 1970, p. 142)

事実ハンブルクの政治指導者はヴァサーカンテ地区の書記であったフーゴー・ウルバンス（Hugo Urbans）で，軍事組織の責任者はハンス・キッペンベルガー（Hans Kippenberger）であった。そして武装蜂起のさいの市の食料供給に託された第三の人物があった（不明)。キッペンベルガーの上官はアルベルト・シュライナー（Albert Schreiner）で軍事顧問はモイシュ・スターン（Moishe Stern）〔変名エミリオ・クレイバー（Emilio Kleber)〕であった。フォークス（Fowkes ibid p. 107）によるともっともありそうなハンブルク蜂起のいきさつはつぎのとおりである。ハンブルクのＫＰＤ地域の政治的指導者であったフーゴー・ウルバンス（Hugo Urbahns）がケムニッツ会議についたとき，会議は終わっていた。そして計画された蜂起を中止するという決定を聞かされた。そこでインゼルベルガー（Inselberger）と名のる同志に「情勢にかんする報告」をもたせてハンブルクへ送った。ウルバンス自身はドレスデンへ行き，ハンブルクへ帰った。そしてまっすぐベッドに入った（10月22日)。翌朝眼をさましたとき，蜂起が始まっていた，というのである。……ウルバンスが命じないなら一体誰が行動を命じたのか。回答は行動を開始したくてウズウズしていた若干の地方党員たちが開始したということのようである。10月21日，ドイツの労働者たちはもし中央政府がザクセンに介入するならゼネストを行う，と決議していた。22日，国防軍介入のニュースが届いた。地方の労組指導者はベルリンの中央部が全国的なゼネストを宣言するよう求め，ハンブルクは武装闘争をすべきでない，と固執した。(10月22日）ＫＰＤの代表エッサー（Esser）とリュール（Rühl）はこの決定を受理することを拒んで，同日共産党員のハンス・キッペンベルガー（Hans Kippenberger）とアルベルト・シュライナー（Albert Schreiner）及びそのロシア人顧問モイシュ・スターン（Moisch Stern）〔変名クレーバー（Kleber)〕に蜂起のプランをつくらせた。

10月23日早朝に蜂起がおこった。武器はなかった。1300人のコミュニストが26の警察署を襲撃してその17を占領した。そしてそこに貯蔵された武器を手に入れた。それを使ってバリケードの脊後から警官を射った。スト中の造船労働者は戦いを続けた。相対して6000人のよく武装した警官と国防軍兵士がいた。闘争は絶望的だった。ハンブルクの労働者地区であったバルムベック（Barmbeck）では25日まで闘争が続いた。キッペンベルガーは蜂起の中止を命じた。このことはのちにＥＫＫＩへ報告された。他の地域では10月24日には蜂起は終っていた。蜂起側の死者21名，負傷者175名，警官と兵士の死者17名，負傷者69名。蜂起側の102名が逮捕された。そしてハンブルク蜂起にたいする法廷で死刑２名，総計430年の禁固刑が課せられた。

ノイベルク「武装蜂起」の中で，Ｈ・キッペンベルガーはバルムベックの蜂起についてつぎのように書いている。

午前５時30分，蜂起者は17の警察署（バルムベック，ヴァンズベック等）を襲撃した。もっとも堅固に保るい化していた第46分署は手榴弾で防御したので，これをおとし，武装解除することはできなかった。午前６時までに入手した機関銃やピストル，軽機関銃で武装した130人が集合地点に集った。手榴弾や弾丸が警察署にはないことがわかった。成功の主な原因は(1)蜂起区の指揮者が前もって警察署周辺をよく調べていたこと(2)警官は武装蜂起に備えずよく眠っており，奇襲されたことである。蜂起の指揮官は武装した同志を鉄道駅，工場の門，その他におくってゼネストを宣言し，労働者を闘争に加わらせるように求めた。運輸は止り，工場は作業を停止した。

午前７時にはバリケードがつくられた。大衆は10月23日に蜂起が始まることを知らなかった。23日になって蜂起がすでに始まっていることを知って自発的に参加し始めた。参加者の一般的要求はわれわれに武器をよこせ，バリケードをつくれ，だった。

バルムベックの蜂起者たちは，闘争の始ったにもかかわらずハンブルクの政治，軍事指導部とコンタクトがとれなかった。午後になって中部セアルトナ地区では蜂起が全然おこっていないことを知った。

10月24，25日の夜は静穏だった。バルムベルクの蜂起者は，十分な援護物をもち，有利な立場にあった……それまでに他の地区では蜂起が続けられていないことを知り，また党から中止命令が届いたが闘争の継続を決定した。住民はあらゆる援助をした。かれらはバリケードをつくる援助をし，パンや煙草をさし入れ，敵に攪乱情報を流した。婦人たちがとくに重要な役割を演じた。だが23，24日の夜ＫＰＤハンブルク委員会の重要なメンバーが闘争中止の命令をもってバルムベックにやってきた。そこで蜂起者は家路に帰り始めた。

キッペンベルガーはつぎのようにハンブルク蜂起について総括している。

第一，ハンブルクの蜂起は二日間続いた。敵軍の圧倒的な優位にもかかわらず，反革命によって粉砕されなかった。中止されたのは党の命令による。武装したプロレタリア軍が自発的に闘争を中止したからだ。敵のハンブルク地区警察側も認めるように，蜂起者側の勇気と断固たる行動が示され，また住民のあつい支持があった。

第二，ハンブルクの蜂起は疑いなくプロレタリア大衆の行動であった。武装したものは比較的少く，250〜300人だった，しかし労働者大象の参加の下にバリケードのネットワークがつくられ，かれらは市内の工場ドック，造船所の労働者たちのゼネストによって支持された。また周辺の若干の都市の労働者より支持をうけた。

第三，しかし蜂起のための政治的準備は極度に弱体だった。各地区の政治書記たちは，決起の命令をほんの数分前に聞いただけだった。……また指導については，まさに蜂起をこのような仕方でやってはならないし，また蜂起にたいするこのような態度をとってはならないことの古典的実例だった。

第四，指導の欠如，貧弱な準備，闘争部隊が極めて弱体でほとんど武装していなかったにもかかわらず……数的に優勢で高度に武装した警察軍に勝利を収めた。

第五に蜂起が勝利を収め権力を握るとき，ハンブルクが孤立し国内の他の主要センターでの，少なくともバルチック地方での，同様の蜂起で支持され

ないなどということは考えられないことである……

「ハンブルクのプロレタリアートは社会民主主義の裏切りにもかかわらず権力を握ることが出来た。しかしそれがおこるためにはＫＰＤの頭部がボリシェヴィキ的指導部でなければならなかった。そういう指導部は存在しなかった」[52)]

第五章　結語「ドイツの諸事件の教訓」

「ドイツの十月」は敗北に終った。否自らそれを「死産させた」のである。ドイツ革命の指導者たちは，先行する1918年11月４～10日の危機も，12月29日のそれも，また19年１月１日，５日～12日の危機も拱手傍観し，討議し，何ら断固たる行動に訴えることなくみ過してしまったのと同様であった。このあとおこることは，モスクワとＫＰＤ中央部の責任のなすり合いである。最大の責任者コミンテルン議長ジノーヴィエフは，プラウダ10月12日号より10月30日号に至る各号に長文の「ドイツ革命の諸問題」と題する論文を書いたが，「ドイツ革命」は決定的敗北を喫した，ということの責任問題には何らふれていない。ブランドラーは23年11月４日「武装蜂起はなお日程に上っている」という趣旨の決議を作成し，40対13の票決で採択した。11月共和国は終焉し，ファシズムが勝利して，ゼークト将軍の独裁が樹立された，というのである。はじめのうちジノーヴィエフはブランドラーをかばって12月２日の論文では「ドイツの党の戦術は正しかった。」とのべている。

ラーデクはラーデクで当然共同責任のあるブランドラーを擁護する。

ロシア共産党政治局は，12月27日の会議でラーデクとＫＰＤ右派を断罪する決議をした。「政治局は左派の誤りと右派の大きな誤りを批判しながら中央委員会（中央部）の多数派（中央派）の支持の上にその政策を基礎づける」。11月３日，ＫＰＤ中央部はブランドラーの決議を40対13で採択する。しかし12月７日には中央部のブランドラーの支持者中17名が左派へくらがえした。ジノーヴィエフはＫＰＤ中央部の11月３日の決議を攻撃し「ザクセン政府に

入閣したブランドラーたちは社民と陳腐な議会主義的連合を行った」とのべる。しだいにモスクワはブランドラーを見限り，レンメレ，エーベルライン，ステッカー，ケーネン，クライネ＝グルラルスキーら中央派を引き立てようとする。こうして，中央派は，「客観的にみて高度に革命的情勢はあったがＫＰＤの後退はブランドラー指導部の戦略的戦術的失敗の結果である」というテーゼを出す。その内容は軍事的準備はもっと早く，ルール占領期につくられるべきであった。決定的打撃を行うため，力を管理するため，９月，10月に大衆を恣意的に抑制した。また大衆を動員するため，ザクセン政府内の党員はその立場の利用に失敗した。プロレタリア前衛の闘争への意志を過大評価した。小ぜり合で闘争をぬきに退却したことは，大衆の党への信頼を失わせる点で誤りだったというものだつた。左派も大体中央派と同様の見解だった。ただ「左派社会民主主義と同盟を求めて行なわれた統一戦線の修正主義的戦術」という批判がつけ加わっている。右派は10月の後退は客観的理由からであって，ＫＰＤの戦術的誤りではなかった，とする。そして唯一の誤りは労働者階級のすべてを社会主義の側に勝ちとったという信念と早期に蜂起の日付をきめたことだとする。

かくてモスクワで1924年１月11日に開始されたＥＫＫＩの幹部会は10月敗北とＫＰＤの情勢を討議することになる。

ＫＰＤ内の三派（左，中央，右）が代表を出したが，この会議のねらいはブランドラーを被告席につけ，すべての責任をかれ一人に押しつけようということであった。この会議で中央派，左派の右派攻撃に続いてジノーヴィエフが総括する。ブランドラーの10月における態度は腐敗の症候をみせた。したがって指導部を変え，中央部の現在の多数派（中央派）と左派で新指導部をつくるべきであるというものであった。問題はすべて小委員会に付託された。この委員会はマースロフ，テールマン（以上左派）レンメレ，ケーネン，ピーク（中央派）及びクーシネン（コミンテルン機関）からなる小委員会にまかせられる。決議は左派と中間派の中間にあるものであった。また会議はブランドラーとラーデクの反対を押して，この決議を採択した。

それはザクセン州政府への入閣問題をとりあげて批判する。

「党員のまずなすべきことは，労働者の武装の問題を容赦なく提起することだった。労働者政権に関与したその時から，プロレタリアートの武装以外の基本テーマが，党員にあってはならなかった。」

さらに党員のなすべきことは，党のプロレタリア解放のプログラムに，加えて政治的に労働者レーテのためのプロパガンダを，全力をあげて大衆のまえに展開し，この手段を左派社会民主党閣僚の無行動に対置することだった。また，議会および工場レーテに働きかけて，生産サボタージュを行なう工場主の企業の没収，住居のない労働者の家族のための富裕な家庭の住居の徴発，といった革命的措置を即刻実施させることだった。……

これらのことがなされず，党が大衆を動員するすべをわきまえなかった結果，ザクセンの実験はおよそ闘争の段階にも至らなかった。結果は革命的戦略ではなくて，『左派』ＳＰＤとの非革命的な，議会的な協同に終った。もっぱら州議会と憲法にたいして責任を負う，と共産党閣僚がことさらにいうことは，民主主義の幻想を破壊するのに適切な方法ではありえない。

全党員機関の緊張した革命的活動によってのみ，ケムニッツ会議（10月21日の工場レーテ集会）は党に，なんらかの成果をもたらしえたろう。じじつは党は敵の攻撃に，予見された全国政府の介入に，なんの対応策ももたなかった。それだけに，ゼネ・ストを提起する予定でいながら，会議の冒頭から議事を全国政府にたいする防衛一本にしぼる努力をおこたったことは，大きな誤謬である。この誤謬は，左派ＳＰＤ指導部の裏切りの策動を，疑いもなく容易にした。

ハンブルク蜂起は，ザクセンの対極をなしている。断固とした戦闘グループを不意に果敢に投入すれば敵は軍事的に攻撃を支えきれないことが，ここで実証された。しかし同時に実証されたことは，こういう武装闘争は，ハンブルクでのように住民の多くの共感に迎えられ，大衆運動の支持を受ける場合ですら，孤立したままならば，そしてその地域自体のレーテ運動によって――ハンブルクでは何よりこれが欠けていた――になわれていないならば，

挫折せざるをえないことである。

闘争そのものは，全国中央からの相互に矛盾する指令によって妨害された。存在していたストライキ運動までが，全国からの闘争の知らせが来ず，ケムニッツ会議の成りゆきの知らせが来たために，だいなしになった。

それにもかかわらずハンブルクの闘争は，模範的な規律を保って中止させることができた。この闘争の教訓は，党とコミンテルンにとって価値多い。そして記憶されるべきものは，蜂起者にたいする軍の行動を支持したハンブルクのＳＰＤ指導部の，低劣な態度である。かれらの態度は，ザクセンのツアイグナーらの『左派』ＳＰＤのそれとともに，一枚のメダルの表裏をなしているのだ。（ドキュメント「現代史」ドイツ革命　平凡社292〜294ページ）

この決議及び報告は「ドイツ諸事件の教訓」（Die Lehren der deutschen Ereignisse, Das Präsidium des Exekutivkommitees der Kommunistische Internationale zur deutsche Frage, Jannur 1924）というパンフレットの形で配布された。

トロツキーは三頭政治との党内闘争が尖鋭化する中で「ドイツの十月」をとりあげる。1924年のトロツキーの論文「十月の諸教訓」の中でである。この論文はスターリン派三頭政治側の猛烈な反批判をうけ，クーシネンがドイツについて非本質的なあげ足とりの反批判をしている。[53]（邦訳コミンテルン編，高山洋吉訳「解党主義の分析と批判」1930年マルクス書房）

さきの論争の中でトロツキーは「ドイツの十月」にふれてつぎのように総括している。

「われわれは昨年の後半に，世界史的意味をもつまったく異常な革命情勢を如何にしてのがしえたかの古典的実例を眼にした……武装蜂起の問題がＫＰＤの指導者にとって，圧倒的に……煽動的な意味をもっていた限りかれらは敵の武装権力の問題を……単純に無視したのである。しかしこの問題が前面に登場してきたとき，これまで敵の武装力を存在しないかのようにみなしてきた同志たちはこの武装力を過大評価するという新しい誤りを犯した。われわれのコルニロフ部隊に比べてドイツの反革命の勢力の方が強力であり，

はるかによく組織されていた。しかし同様にドイツ革命の積極的な勢力もまた異っていた。われわれの場合……つねにペトログラードとモスクワが決定的であった。ドイツでは蜂起は直ちに多くの強力な革命の群をもっていたであろう。こういう視点から考察するならば，敵の武装力は統計数字にみられるように強力なものではまったくなかったであろう。」(邦訳．トロツキー選集第５巻現代思潮社　70〜102ページ)

わたくしもまたこのトロツキーの見解に同調できる。コミンテルンやＫＰＤのマルクスやレーニンの弟子たちは，マルクスやレーニンのつぎの言葉をどううけとっていたのであろうか。

「マルクスの弁証法的唯物論の見地からすれば，こういう情勢のもとでは，〔1870年パリ・コンミューン〕また他の多くの情勢のもとでもそうであるが，既得の陣地を放棄するよりも，たたかわずに降伏するよりも，革命的行動の敗北のほうが，プロレタリアの闘争の一般的行程と結果とにとってまだしも害がすくないのであった。そのような戦いぬきの降伏は，プロレタリアートの士気を退廃させたであろうし，その戦闘能力をそいだであろう。」(レーニン全集　第22巻67ページ)「偉大な闘争がはじまるまえに敗北をおそれるものが社会主義者だなどと自称するのは，労働者を愚弄することに他ならない。」(レーニン全集　第33巻６ページ) 決して左翼ではない歴史家セバスティヤン・ハフナーは，「裏切られたドイツ革命」(セバスティヤン・ハフナー山田義顕訳「裏切られたドイツ革命」平凡社89年６月334ページ) の中で1918年から20年３月までの革命史を詳述した上で「時の恵みをはねつけるとそれをとりもどすことは永久にできない」という言葉で結んでいるが，いいえて妙である。この一語にドイツ革命の悲劇が凝集していると思う。

(あとがき。このつたない論文を亡き友本川誠二君にささげる。かれはわたくしのまたとなき心の友であり学問の友であった。また大学や学生のためにあれ程つくして報いられることの少かった同僚であった。)

〔註〕

1) Thalheimer; im Jahrbuch 1923／24 S. 604

2) Rosenberg; Geschichte der Deutschen Republik S. 159

3) Rosenberg; Geschichte der Deutschen Republik S. 159

4) Frölich im Jahrbuch 1925／26 S. 731

5) Bericht der Zentralle an den 9 Parteitag. 9 Parteitagsbericht S. 46

6) Enderle im Jahrbuch 1925／26 S. 754

7) Rosenberg ibid S. 159

8) I I Parteitagsbericht S. 538

9) Jahrbuch 1923 ／24 S. 605及び Bericht der Zentralle an den 9 Parteitag Bericht S. 62

10) Rosenberg; Geschichte der Deutschen Republik S. 159

11) 他の評価によれば1920年9月には共産党員の労組幹部は，400人といわれる。9 Partei tagsbericht S. 64／11

12) Bericht der Angestellten der Gewerkschaftsabteilung der Zentrale, 9 Parteitagsbericht S. 97

13) Brief der Angestellten der Gewerkschafts－abteilung der Zentrale 9 Pateitagsbericht S. 97

14) Jahrbuch 1923 ／24 S. 588

15) ibid S. 605

16) Ben Fowkes; Communism in Weimar Repablic p. 97

17) Angress; Stillborn Revolution, the Communist Bid for Power in Germany 1921～1923 Prinston University Prss p. 358

18) この時期のドイツ共産党のシュラーゲター・ラインと反ファシズム闘争の一見相矛盾する方針について，アングレスはつぎのように説明している。

「1923年を通じてコムニストの『反ファシズム』の叫びはシュラーゲター・ラインにもかかわらずやんだことはなかった。それどころか党の民族主義的キャンペーンの頂点で，政治的右翼に対する党機関紙のトーンは極めて甲高いものであった。

それにはいくつかの理由があった。第一にコムニストはファシズムということばの中にヒットラーのナチスからドイツ国民党にいたるドイツ右翼の巾広い層をふくめていた。クーノ政府が，ドイツ国民党から民主党にいたる連合を基盤としていたのでコムニストは大資本，義勇兵，黒い国防軍，ヒットラー・ナチスとの結びつきを強調することでこれを信用失遂させようと望んだ。さらにドイツ労働運動の非共産主義的部分にシュラーゲター・ラインがひきおこした不利な反動と対置するため，反ファシスト宣伝が行われたのである。

さいごにもっとも重要なことは，中央部は理由はなくもないが，民族主義的陣営の中での活動が，労働者の側の対抗手段を正当化すると考えた。」(Angress ibid p. 355)

19) E Meyer; The Situation in Germany, Inprecorr No 53. 26 July

20) Angress ibid p. 363

21) トロツキー「スターリンの政治的伝記のために」選集補巻 I，218 ページ

このスターリンの手紙は一度もソ連で公表されたことはないが，トロツキーの論文中に引用されている。その独訳はブランドラーがやったという。1948年2月1日，ブランドラーはドイッチャーとの会談の中で「この手紙は信頼できるものでありトロツキーが公表したその内容は正しい」と確認している。(New Left Review, Sep－Oct 1977. p. 51)

22) Inprekorr 1923 －3－8 NO. 128 1117 RF 8－1923

23) G. Horschansky; Die nationale Verrat der deutschen Monopolherren, während des Ruhrkampfs. 5 Fowkes;ibid p. 98 Berlin 1960 S. 164.

24) F. Stampfer; Die virzehn Jahre der ersten Deutschen Republik karlsbad 1936 S 343 山田修「ルール闘争期のドイツ共産党」(3) 115ページ

25) Radek; Die Regiernng Stresemann, inprekorr 1923 Aug 20. No 135, P. 1125

26) Ruth Fischer; Stalin und der Deutsche Kommunismus, Verlag der Frankfurter Hefte 1950. S. 366

27) Ulbricht; Zur Geschichte der deutschen Arbeitecbewegung. S. 126

28) Angress ibid p. 378

29) Angress ibid p. 328

30) Inprekorr No 138 1923 27. Aug.

31) このジノーヴィエフのテーゼは，一般に公表されずのちにトロツキー対三頭政治（スターリン，ジノーヴィエフ，カーメネフ）の最初の局面，トロツキーの「十月の諸問題」をめぐる討論でクーシネンのトロツキー反論の中に引用されている。(O.W.Kuusinen; Eine missglückte Schilderung des "deutschen Oktober" Inprekorr 12 Dez 1924. No 161)

32) Inprekorr No. 140. 31 Aug. p. 1220

33) Angress; idid p. 328

34) Boris Baschanow; Ich war Stalins Sekretar 1977. Ullstein, Boris Bajanovi Avec Staline dans le Kremlin Paris 1930,

35) Ben Fowkes ibid p. 101

36) Bascharow; ibid S 57.

37) Angress P. 428 P. 1923 R. F 10. 10 No 218

38) ザクセンでは1923年1月社会民主党右派のヨハン・ウイルヘルム・ブック（Johann Wilhelm Buck）政府が中間階級の政党と共産党の不信任投票で破れた。3月4・5日のザクセンの社会民主党州大会で民主党と連合を組もうという右派の動議が破れ，社民多数派の左派は共産党と協議を重ね連合政府をつくることになった。3月21日州議会の投票で49対46で社民左派のエーリヒ・ツアイグナー（Erich Zeigner）を首相とすることが決められた。共産党は閣外協力を約した。この政府はファシストの攻撃にそなえて，プロレタリア防衛隊を結成することを決定した。ツアイグナーはベルリンの中央政府の政策とくにルール占領にたいする政策には批判的であった。経済政策もまた私経済から集団経済への移行を宣言していた。

またチューリンゲンでは1921年10月に社民政府が成立して以来共産党の支持をうけていた。アウグスト・フレーリッヒ（Augst Frölich）首相は，中道政策をとろうとしていたが，たえず共産党の圧力の下に左傾化してゆき1923年までにはベルリンの中央政府と対立するに至った。3月には右翼の危険からの防衛のためプロレ

タリア防衛組織をつくることを決めた。この二つの州の「赤い政府」のブロックはブルジョアジーと右翼および中央政府にとって憎悪の的であった。

39) New Left Review Sep.— Oct. 1977. p.51

40) Bericht 9 Paiteitag. S.24 Forwkes p.102

41) Fowkes ibid p.102

42) Die Kommunistische Internationale No 11 (1925) p.1203.

43) Ruth Fischer; Stalin und der deutche Kommunismus, Verlag der Frankfurter Hefte S.393

44) 9月16日の緊急令でザクセンの執行権力をもった第四管区指揮官

45) Angress ibid p.425

46) Sinowjew; Probleme der deutscher Revolution, Imprekorr 1923. No. 163

47) John Reed; Ten Days that shook the World.

ジョン・リードの伝記はタマーラ・ハーヴィ著飛田勘弐訳「時代の狙撃手・ジョン・リード伝」至誠堂選書参照

48) 1895〜1927ソ連の指導者ラスコルニコフの美貌の妻。ラーデクの恋人。

49) Larissa Reisner; Berlin im Oktober, Reisner ; Hamburg an der Barrikaden Berlin 1960 S.90 −94 (ドキュメント現代史2 野村修訳「ドイツ革命」平凡社 p.281 〜 284)

50) Lothan Danner; Ordnungs Polizei Hamburg. Betrachtung zu ihrer Geschichte 1918 −bis1933 (Hamburg 1958) S.67 −74

51) Zeutschel, Im Dienst der Kommunistischer Terror−Organisation p. 15, Flechtheim; KPD in der Weimar Republik, S,96

52) A Neuberg; Armed Insurrection NLB London 1970 p101-104

53) Kuusinen, Eine missglückte Schilderang des "Deutschen Oktober", Inprekorr No.161 12 Dez. 1924

しかし，のちにアイノー・クーシネン（Aino Kuusinen）は1935年末，夫オトー・クーシネンとの会見中かれがいった言葉としてつぎのようにのべている。

死産した革命「ドイツの10月」

「君は覚えているだろう。1923年秋に，ドイツでは革命の危機が熟しているようにみえた。経済情勢は絶望的で，通貨は完全に無価値になった。ＫＰＤと労働者は革命をやりとげる意志があった。かれらは十分な武器と細部にわたって仕上げられたプログラムをもっていた。それでも革命が始った10月22日には何がおこったか。何もおこらなかったではないか」

（Aino Kuusinen; Der Gott Stürzt Seine Engel, Verlag Fritz Molden, Wien－München－Zurich 1972 S. 160）

（1989. 10. 12 受理）